からしだね

2019年1月号
(545号)

キリストの受難 カトリック池田教会
主任：ノノイ・プラザ神父
住所： 〒563-0041　池田市満寿美町9－26
TEL ： 072-751-2400　FAX：072-753-4624
URL(ホームページ)：http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/

本号の記事の主題など

ノノイ･プラザ神父の巻頭言
「メリークリスマス！」(Japanese and English)
歳末助け合い募金に参加
黙想会(待降節に向けて)レポート　(研修委員会)
1月 の 教会カレンダーへの追加
講話などを記録したCDの貸出
ドレミの会が今年もクリスマス会
表紙の写真について
みんなの談話室
　ベトナム巡礼のめぐみ
大人の日曜学校だより　(研修委員会)

巻頭言

メリークリスマス！

ノノイ・プラザC.P.

“メリークリスマス！”　あと数日でクリスマスだから、こう言っておきます。

みなさん、おおくの尼僧やシスター、ブラザー、それに司祭がおくった信仰生活を調べてみると、いつも聖アントニウスが出てきます。なぜかって？それは、いつも彼が「修道生活の父」と考えられてきたからなのです。

こんな風に彼が言ったと伝わっているのを御存知でしょう―「人間である皇帝がわたしたちに書き送ってきたとしても、驚かなくてよい―むしろ、人間のための法を神がお書きになり、御ひとり子をとおしてわたしたちに語られたことに驚くべきだ。」(『聖アントニウス』81ページ)

じっさい、じっくり考えてみると驚くべきことですね。想像してもみてください、途方もなく大きなひろい全宇宙の創造者が、まさにわたしたち人間の言葉で語りかけてくださったと。ただただ人知を越えています。しかし、これこそ御ひとり子イエスキリストをわたしたちに送られたとき、神さまがなさったことなのです。

クリスチャンが二千年以上のあいだ祝いつづけ驚嘆してきたのは、このことでした。神の啓示について考えるとき、大事な洞察が得られる『ヘブライ人への手紙』には、「過ぎ去った時代、神は祖先には多種多様で不完全な言葉を使い、預言者たちをつうじて語りかけられた。だが、いまの時代には御ひとり子をとおして、わたしたちに語られるようになった･･･」と書いてあります。

あるいはヨハネが簡潔にいうとおり「御言葉は肉となって、わたしたちのあいだに生きておられる。」もじどおり、神は「わたしたちのなかにテントを張られた」のです。こんなにも親しく、神はわたしたちとかかわろうとされています。わたしたちがたやすく神とつながることを望まれた。だからこそ人間のひとりとなり、テントまで張ってわたしたちのなかに入りともに暮らされた―これこそまさしくクリスマスのほんとうの意味です。

御ひとり子である神はいまも私たちとともにおられます。イエスが天に戻られたとき、愛する弟子たちに約束されました ―「時の終わるまで」　(マタイ28･20)あなたたちとともにいる、と。またイエスの名によって私たちが集まるところ、わたしたちのなかにおられるとも請けあってくださったのです。(マタイ18･20)

だからクリスマスとなったいま、喜び勇んでイエスの御生誕を、いつもわたしたちのなかにおられることを、栄光に包まれて最後には戻ってこられるとき、お姿をふたたび目にする希望を祝おうではありませんか。もういちど、すべてのかたにメリークリスマス！神の祝福を！

１月のガラスケースのことば

常に喜べ　絶えず祈れ　どんな事にも感謝せよ

１テサロニケ　5･16～18

Heading Article

MERRY CHRISTMAS !

Nonoy Plaza C.P.

I say this because Christmas day is but a few days away.

Dear friends, if you want to study the history of Religious Life (which is the life lived by many nuns, sisters brothers and priests), you will always encounter the name of St. Anthony of the Desert. Why? Because he has always been considered the Father of Monasticism.

You know what, at one time, he was said to have said: 'Do not be astonished if an emperor writes to us, for he is a man; but rather wonder that God wrote the Law for men and has spoken to us through His own Son' (*Life of Anthony*, s. 81).

Indeed, if we think very deeply about this, it should amaze us. Imagine, the Creator of the whole universe, which is so vast and wide, spoke to us in our very own human language? It is simply beyond comprehension, isn't it?. And yet God did in when he sent his only Son Jesus Christ to us.

This is what we Christians have been celebrating and have been marvelling at for more than 2,000 years. The Letter to the Hebrews, which provides us an important insight into our study of Revelation, says: "In times past, God spoke in various and partial ways to our ancestors and the through the prophets; in these last days, he has spoken to us through the Son …"

Or as John succintly puts it: "The Word became flesh and made his dwelling among us." He literally "pitched his tent among us." This is how much he wanted to relate with us – in a very intimate way. Indeed, He wanted us to be able to relate to him easily. And for this reason, He became one of us; putting up his tent, as it were, among us and lived with us. This is the true meaning of Christmas.

And he continues to live with us. When Jesus went back to heaven, he assured his beloved disciples that he will be with them until the end of time (Matthew 28:20). And also, when we gather in his name, he assures us that he will be in our midst (Matthew 18:20).

At Christmas time then, let us joyfully celebrate Jesus's birth, his continual presence among us and our lively hope of seeing him once again when he finally comes back in glory. Once again, MERRY CHRISTMAS TO ALL! God bless!

歳末助け合い募金に参加

12月2日の主日、社会活動委員有志と日曜学校の子供たちが歳末助け合い募金に協力するため、阪急池田駅前に立ちました。日曜学校の子供たちが元気よく大きな声で呼びかけ、通りかかる人々から、首にさげた募金箱に寄付金を入れていただきました。子供たちに目を留め、笑顔で募金に応じてくださった皆様、ありがとうございました。

11月 黙想会(待降節に向けて)　レポート

11月２５日、カトリック高槻教会の清川泰司(せがわたいじ)神父様によってミサ、待降節に向けた黙想会の講話(テーマ:受肉した神の御心)、ゆるしの秘跡が行われました。

今年の秋頃(９月頃)から委員会として準備を始めてきたのですが、私にとっては初めてのことばかりで、どうにかその運営がつとまるか否かという点では、多少の不安もありました。初対面の神父様と連絡を取るところから始まって、やったこともない司会のようなこともやり(それも必要なことであったか、議論もあると思います)、その日の午後ようやく神父様の車を見送るまで、気が抜けない中、何とか任務(？)をやり終えた気がしています。

神父様のお話(講話)でいうと、私が興味深かったのは、旧約聖書の物語にその多くの時間を割かれたことでした。(中でも、アダムとイブ(エバ)の話は非常に人という存在の真実を突いていると、私はかねてより思っていました。)

また、カインとアベル、バベルの塔の物語と、神父様が語られていたのは、終始一貫して、人間の愚かさ、浅はかさでした。

私は人間というのは、「能力」によって自信を養い、それが自負心となり、やがて過信を産むものだと思っています。たとえば何か、コンピュータが扱えたり、語学が堪能だったり、数学の問題が解けたり、またその評判によって自らの能力を意識し、人は自意識に目覚めます。私はそれが、時としてアダムとイブのいちじくの葉であるような気がしていました。

ただ、その自信も特定の分野を対象とした限定されたものならまだ良いのですが、どうしても自分という存在への過大な「自己意識」へとつながるのは人間の性(さが)というものかもしれません。

そうした人間の至らなさに対する救済として、神の御心を受肉したのがイエス･キリストであった、そう神父様は説かれます。

「人を裁くな、あなたがたも裁かれないようにするためである」、「あなたは兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の丸太に気づかないのか」。あるいは、「三日で建てなおす」といった神殿のことも、イエスご自身の復活を意味していたこと等々。

これら受肉したイエス･キリストの福音はクリスチャンなら、何度も読み聞かされてきたことですが、それをもう一度この黙想会でおさらいをしたような、良くまとめられた講話だったと思います。

そして今回、会の運営を通じて私にとってははからずも多くの出会いや発見もありました。とくに、自分の意見への賛同を求めようと相談した相手から、逆に反対意見を言われたこともありました。人間、自分と同意見の人とは好んで集まるのが通常ですが、でも、意見や考えが自分とは違う人と出会うことは、私にとってはむしろ貴重です。なぜなら、そこに勉強があるからです。

その中で、私はこんどの黙想会で、昼食にお茶とスーパーのおにぎりしか出せないことを、内心、心苦しく感じていました。しかし、当日本番になって何人になるかわからない参加者の数、余っても大変ですし、足らなくても困るといった現状で、それなりの料理を用意しようとすると負担が大きいことには、合理性があり、正当性があり、経験的にも妥当な意見だというのはわかっていました。

そうした時、私は思いがけずある日、ある年配の信徒の方にそのことを話す機会がありました(決して不平、不満というニュアンスではなかったのですが)。するとその方から「黙想会はパーティーやない。沈黙のうちに、謙虚に黙想し、内省し、内面を深める機会や。ならば、そんなぜいたくな料理なんて、なくて本来だ」ということをビシッと言われ、「本当にそうだ」と思ったことを私は今も忘れられません(もちろん、その方のアドバイスには感謝の気持ちしかありません)。

(次ページにつづく)

また講話では、聖書を解説しながら、清川神父様が人間のちっぽけさや浅はかさを語る時、たびたび大阪弁で「俺もせやねん」とつけ加えておっしゃっていたのも印象的でした。それは、何もいい格好をして言うのではなく、「私だって同じだ」という神父様の思いであり、お人柄であり、同時に謙虚さがにじみ出た言葉だったのではないかと私は思います。

そんな神父様のお話は決して重くなることはなく、関西弁のウィットと巧みな比喩やジョークを交えながら、もちろん内容充実でしたが、同時に笑いのたえない楽しいものとなり、色々と考えさせられ、学ぶことも多かった今年の待降節の黙想会も、私自身、明るく爽やかな気持ちで終えることができました。

最後に今回の黙想会についてアンケートの集計があり、その中で、私の胸に響いたいくつかのご回答からそのひとつを匿名であることも踏まえ、ご紹介させていただきます。

『良かった！　ちょっとわかった！　おもしろかった！　神父様、ありがとう♡』

研修委員会

１月 の 教会カレンダーへの追加

1月 6、13、20、27日（日）　13::00～14:30
信仰入門
1月10、17、24、31日（木）　10:30
聖書百週間
1月11、25日（金）　14:00～16:00
福音書を学ぶ会
1月13日（日）　デニス神父様追悼ミサ

講話などを記録したCDの貸出

故國井健宏神父が要望されたマザー・テレサの講話（國井神父様の通訳付き、1984.11.22）や清川泰司神父さんの待降節に向けた黙想会の講話などを録音したCDを当池田教会の内部での使用に限定して貸し出しを始めます。これらのCDをカール記念館一階ホールに置きますので、新着教会図書などとほぼ同様に貸出しカードに姓名と借り出し日を記入し、CDプレーヤーなどを利用して聴取してください。借り出し期間は一週間です。

尚、講話のスピーカーなどの好意による貸し出しですので、CDのまた貸しやそのコンテンツをWebにアップロードすることはご遠慮ください。

広報委員会

ドレミの会が今年もクリスマス会

12月8日（土）に「ドレミの会」は恒例のクリスマス会をおこないました。ハンディーをもったたくさんのこどもたち、その保護者でホールはいっぱいになり、笑顔があふれました！

ゲストに来てくださった、日生中央教会の茅野さんたち「縁」の皆さんの弦楽4重奏が、「アナと雪の女王」やクリスマスメドレーなどの美しい演奏を聞かせてくださり、池田教会のギタリスト大西さんがお友達と、息の合った細やかな演奏で「ロマンス」他、何曲かを弾いてくださいました。いつもダンスを指導してくださってる「タップ～じだんだ～」の素晴らしいステップや、みんなの参加するタップ体験、スタッフの語るこころに染み入るお話など、時のたつのも忘れるほどでした。そして　みんなで1年間練習した歌～どこまでも　ゆこう～を大きな声でアレンジしながら歌いました。

さて最後はお待ちかねサンタの登場です！ここでいつものデニス・サンタならぬ、元気なスタッフのおにいちゃんサンタが皆にプレゼントをわたしてくれました。教会の皆様のあたたかな思いのこもったプレゼントをいただく時の子供たちのうれしそうな顔！かお！見ている私たちも幸せな気持ちになります。本当に毎年、たくさんのプレゼントをご寄付くださり、感謝の気持ちでいっぱいです。

くる年もスタッフ一同心をあわせ、社会では弱い存在の彼等のささやかな憩いの場を、皆さまに応援していただきながら続けていけたらと思っています。

本当にありがとうございました！

ドレミの会

表紙の写真について

池田教会聖堂内を飾っているイエス・キリストご降誕の模型である。12月2日、待降節第1主日に、典礼委員や総務委員、その他有志により、聖堂内と道路脇のガラスケースの下に馬小屋が設置された。この時点では、まだイエスはおられない。クリスマスツリーも立てた。中高生たちは聖堂の屋根にのぼり、イルミネーションを取り付けた。馬小屋が置かれると、クリスマスが近づいてきたことを実感する。喜びの日がまもなく来る。日常生活でも、希望の大切さを思う。小さな希望であっても、それが心にあれば、前向きに生きていける。クリスマスを迎えるとき、イエスは希望である。馬小屋は「主の公現」の日、1月6日まで飾られている。

広報委員会

みんなの談話室

ベトナム巡礼のめぐみ

Y.N.

11月19日月曜日の早朝、ベトナム巡礼旅行に参加するために家を出た。日本に帰化なさったベトナム人の仁川教会主任司祭、和越神父様がご自分の実家へ信徒を連れて行くという旅である。巡礼旅行には、メコン川を手漕ぎボートで行く、という魅惑的な計画もついていた。息子を司祭にして日本に送りだした家庭とは、どんな雰囲気なのだろう？　日本とベトナムのカトリックはどう違うのだろう？　暮らしに密着した信仰が垣間見られるのではなかろうか？　漠然とそんなことを思いながら、ベトナムについてなんの予備知識も持たずに、出発の日を迎えたのだった。

聖ヨセフ大聖堂

首都ハノイへ着くと、バスで市中へ向かった。市内へ入ると和越神父様がバスを降りて人力車シクロで大聖堂へ向かおう、と提案した。えっと驚く年配の巡礼参加者たち。二人乗りのシクロでゆらゆらと街路を行く。そばをバイクが通りぬける。車はホーンを容赦なく鳴らす。道路には排気ガスが充満していて、空気が灰色に濁っている。前をふいに横切る車やバイクにひやひやしているうちに、大聖堂に着いた。聖ヨセフ大聖堂。ハノイ地区を統括している教会だ。教会前には大勢の人々がたむろしていた。しかし人々の間をすりぬけて教会内へ入ると、そこはしんと静まり返っていた。正面には幼子イエスを抱いたヨセフ様。ステンドグラスの壮麗な内部を拝見しながら、遠いベトナムの教会で祈ることができるお恵みを思った。

翌日はハロン湾で貸切りの観光船に乗り、奇岩をめでながら船内でシーフードの昼食を取り、途中で下船して鍾乳洞巡りもするという計画だ。しかしその前に和越神父様がホテル近くのホンガイ教会へ聖体訪問に連れていってくださった。お金持ちの家が並ぶ小高い丘にある地元の教会。地元の教会といっても、日本では考えられないぐらい大きな建物である。誰もいない朝早い教会の中で、マラナタなどの聖歌を大きな声で歌った。午後からはバスで４時間かけて、いよいよ神父様の故郷ナムディンへ向かう。ナムディンは南北に長いベトナムのやや北部にあり、カトリック教徒が集中して住んでいる田園地帯だ。ナムディンに着くと、午後８時に立派なコイドン教会でミサ。ベトナム人司祭二人の補佐を受け、日本語の堪能な和越神父様がベトナム語で朗々とミサを司式なさった。

21日、ナムディンの大きな教会を巡った。ごく近い距離に巨大な教会がいくつもある。プーニャイ

プーニャイ大聖堂

（次ページにつづく）

大聖堂、ナムディン大聖堂、ブイチュウ大聖堂、プウアン教会。どれもよく似た感じだった。天に突き刺さるようにそびえる塔、コンクリート造りで天井の高い、堂々たる聖堂。ベトナム人の好みを反映して、豪華な内陣がきらびやかに光り輝いている。どの教会にも立派なキリスト像やマリア像が飾られており、そのお顔は若々しく、着衣は華やかな色合いだ。大聖堂を取り囲むように、教会と見まがうばかりに御像を飾り立てた壮大な建物が立ち並んでいるところがあった。お金持ちのカトリック信者の居宅だそうだ。教会のそばは天国に近いと思われているのだろうか。

富豪の居宅の一例

ブイチュウ大聖堂の横にある、殉教者の記念館を訪れた。ベトナムには117人の殉教者がおられる。日本にキリスト教が伝来したころ、ベトナムにもキリスト教が伝わった。当初は教会があちこちに建てられ、順調に布教が続いていたが、中国色の強いグエン朝時代になると、一転してキリスト教は禁止され、迫害が始まった。迫害は19世紀末まで、散発的に続いた。記念館には当時の拷問道具が展示され、中国風、ベトナム風などのさまざまな衣服を着た等身大の殉教者像が、柩に横たわるような形で多数並べられていた。和越神父様の先祖も殉教者の一人だと伺い、脈々と続いているカトリックの血筋を思った。

（次号につづく）

大人の日曜学校だより　11月18日

「人の子は、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」（マルコ 13･24-32）

前週に見たパウロの映画『パウロ　愛と赦しの物語』がとても印象的だったので、大人の日曜学校の時にその映画の話をし、皆で当時の様子を想像しました。

特にパウロとルカが見せしめとして、明日、猛獣の餌食にされようとしているキリスト者達と獄中で一緒に「主の祈り」を合唱するという、耐え難きも尊いシーンの話をしました。

私達は毎週日曜日、穏やかな平和の中で主の祈りを唱えていますが、映画の時代のように、平和でない時代のさなかでのイエス様の言葉の意味や役割はとても深く力強かったのだと、当時の光景を思い浮かべることによって、福音書がより身近に感じる事が出来ました。

しかしながら、今回の福音の意味はとても難解の様に思われましたので、当時イエス様がかたられた光景を思い描き受けとめながらも、独自の解釈で誤謬（ごびゅう）に陥らない事が大切だと、皆で確認し合いました。

※今回は新たに大人の日曜学校に参加された方に寄稿をお願いしました。

研修委員会

編　集　後　記

年末というのは否応なしにやって来る。やるべき事が多いのに、久々に重症の風邪で思うように動けず、家族は転倒して腕を骨折し、日常生活に色々な介助が必要でてんてこ舞いをしている。こんな時こそ、神様に悔い改め回心し、感謝をするべきなのだろう。熱にうなされながらぼんやりとそんな事を考えていた。どんな境遇の人にも等しくクリスマスがやって来る。全ての人が暖かな光に包まれるような良いクリスマスを迎えられるよう願います。

Ana